

二〇三三年一〇月一五日

梧桐の実虫の卵にさも似たり	うつぎ
汀子展めぐる遺品のみな清か	わかば
酒蔵の天窓洩るる冬日差し	たか子
忠魂碑高し八千草籬とす	よう子
色変へぬ松を要に苔の庭	たか子
目に涼し汀子手縫ひといふドレス	小袖
鬼貫の句碑に侍者めく曼殊沙華	せいじ
いと小さき苔庭の花蝶もまた	うつぎ
笹の葉の疾く流れゆく水の秋	むべ
露しとどなりし関守石の縄	せいじ
官兵衛の土牢何処ぞ昼の虫	うつぎ
大樽の箍緩みなし新走り	たか子
木洩れ日がシャツ模様なす小春かな	むべ
背丈より高しと思ふ女郎花	澄子
庭門の苔むす屋根に露光る	康子
古城址の土塁を埋む蜚草	せいじ
竹林の洩れ日を浴びる小春かな	康子
苔庭のひろびろとして冬日燦	むべ

積まれたる空らのトロ箱秋の蠅	かえる
矢の如き魚影水澄めりけり	澄子
添削の二重丸欲し椿寿忌	ぼんこ
揺れ合ひて秋桜風におしやべりす	素秀
池の面にとどまりがたし秋の雲	澄子
頼山陽由来の柿とツーショット	たか子
城跡の土塁をつづる千草かな	ぼんこ
飛石に蹲り見る苔の花	わかば
高原の霧払ひをる大風車	素秀

定例WEB句会みのる選

二〇三三年一〇月一五日